

池田 NPO 嘱託職員・写真家

高瀬一仁さん（五十歳代）

### 五感から蘇る被害の記憶

十二日の夜、十時半に実家の方に向かいました。車では行けないので、徒歩で向かったんですけど、既に水が入ってたんです。腰以上のところまでできて、何もできない状態でした。実家の方の様子を見て父親の安否確認をしたんですけど、どうにもならない状態で、テレビも一台だけしか上げられない状態で、とにかく夜が明けないととにかくないってことで。帰りがけにいろんなところを回って、駅の方も心配で様子を見ながら帰っていた中で、車のクラクションがずっと鳴っていたのを記憶しています。

五感であの時の被害の記憶っていうのを考えると、いまに鮮明に蘇ってきます。あと匂いです。まいの隣の方は油が浮いていたんです。灯油か重油かわからないですけど、とにかく油が流れていて、それが肌にくっついて入った瞬間に足元から服の方までまとわりついてきて、その刺激臭と、あと泥の異臭とか、あとは音ですね。クラクションがあちこちで鳴って。ショートをするんですよ。車の防犯アラームは。それがバッテリーが切れないと鳴り終わらない。役場の駐車場の公用車が、クラクションずっと鳴りっぱなし。あと病院の駐

車場も同じ状態。ほんとに、音にも肌触りとか、その冷たさ、水の変な生ぬるさもあったんですけど、空気感とかっていうのをいまだに覚えてます。

### 後から気付く被害も

車の話なんですけど、うちは高台にあるんで被害はなかったんですけど、家内の車が冠水した場所を走ってしまったがために、一週間経ってからショートみたいな形で勤務先に向かっている途中で動かなくなってしまったというんです。レックカーも予約がいっぱいで、一週間以上置きっぱなしにしていたので、夜中に運んでディーラーに持っていったんですけど、ディーラーもEパワーとかハイブリッド車のバッテリー積んだ車がずらーって並んで、もう廃車っていうことで。全く関係ないところにいるようで、でもやっぱり被害がかなりあったなっていうのを覚えてますね。

### さまざまな課題とジレンマ

あとはゴミ出しをずっと三カ月にわたってやっていた中で、最初は気が張っているので頑張れるんです。一日何回行っても大丈夫なんですけど、食料がなくなってくる、どうしようとなって、スーパーも被災してやってない。とにかくあるもので済ませようっていうことで、炊き出し、まいん

でやってるから行ってもらってくる。けど他の人はわかんないだろうなと思ってSNSで発信する。来られる人はいいけどたぶん見てない人はわかんないよね、って言ったり。で情報伝達もすごく心配でした。私ができることと言ったらSNSでこういう状況だということを発信すること、知ってもらおうこと、メディアに取り上げてもらうこと、っていうことで心がけてやってたんですけど、やっぱり疲労もたまってきました。疲れもたまってきた、最後はいろんなところで不満も出てくるんです。誰にぶつけていいんだかわからない。心のつらさっていうのはだんだん溜まってきて、それを吐き出す先がないですよ。家族はみんながんばろうとするんですけど、いざやっぱり一日疲れて帰ってくると寝る場所がないですよ。実家にはもう寝る場所なんかないので、うちの方に家族は泊まって、っていうことで三か月それが続いたんですけど、いざ今度住む場所どうする、ってなったときにアパートもいっぱいではないんですよ。そういうジレンマをかかえながらいろんな課題にその場でぶつかっていたのをいまだに覚えてますね。それがまだ課題だと思います。いろんなところでそういう思いをかかえながら被災した人たちは、できることはみんなで協力してやってたので、お互いに大変だったけど食料持ってもらってくれた人もいるし、会社の同僚

の方が休みの日に手伝いに来てくれた日もあったりとか。ほんとに自助作用っていうんですか、自分たちでできることをとにかくやるしかなかった状態がしばらく続いてました。